

中村憲吉全集

中村憲吉全集

第三卷

中村憲吉全集 第三卷 (全四卷)

一九三八年三月五日 第一刷発行
一九八二年一月二五日 第二刷発行

定価 六五〇〇円

著者 中村憲吉

発行者 緑川亨

発行所 鐵岩波書店

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目
電話 〇三・三六二二
振替 東京六十二四三

印刷・精興社 製本・松本製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

記紀歌謠の研究 一

記紀の歌に就いて 三

記紀歌釋 三三

仁徳天皇の御歌 五七

萬葉集の研究 七

總説 九

萬葉集卷一 一〇一

萬葉集卷一 一五

萬葉集卷二 一八

萬葉集卷一 二〇六

萬葉集卷一……………三六

萬葉集卷一……………二五一

中學時代の作品……………二八五

夜道……………二六七

亡き妹……………二九一

俳句 その一……………二九五

名残の吹笛……………二九六

俳句 その二……………三〇一

山寺の一夜……………三〇二

俳句 その三……………三〇八

發火演習記事……………三〇九

高等學校時代の作品……………三一九

曾讀錄……………三二二

熱汗餘滴	三六四
有村溫泉濱の夕	三六四
世捨人	三七五
青年之都會病と地方之將來	三六七
學窓餘情	四〇六
第一集	四〇六
第二集	四三三
自覺論	四六〇
俳句	四七四
英雄崇拜論	四七五
偶感直筆	四七六
霧島旅行雜記	四八二
對鏡心理論	四九六
雜纂	五二七

海の上のかせ	五九
回顧と私の短歌	五二
歌會歌評	五九
言道と望東尼	五一
甲山高等女學校校歌	五五
明恵上人の歌	五六
年譜・著作年表	五七
卷末記	一

記紀歌謠の研究

記紀の歌に就いて (筆記稿)

記紀の歌に就いてお話するといふ事は、私にとつては逆も僭越な事で、一夜漬で手のつけられるものではない。その上古事記はまた歴史的事實をも背景として考へて見る必要もあるのであるが、萬葉集などに比べると時代もずつとぼんやりしてゐて、學者としても本當には分らないといふのが事實である。それを背景としてこれらの歌を説くといふ事は随分無理が多いと思ひます。唯ここでは古事記の文章を読み乍ら味つてゆく外ない。書紀の方は多少色合は違つて居るが、私としては一切の面倒を抜きにして今の世の歌學び者が味つた所を述べて見るといふに過ぎません。然し調べるためによく味つて見るといふことが十分に出來てゐないのを残念に思ひます。

倭記紀の歌については學者間にも色々な説があつて、ある學者(橘守部、上田秋成)の如きは此等の歌、ことに古事記などは少くとも雄略天皇の頃乃至それ以後に物語り作者がいろいろ加減に加へたのであらうと言つてゐる。然しずつと通して讀んで見ると、さう斷定してしまふのも早計の様に思はれません。

一體記紀の歌には色々な特徴があつて、同時代に出来たものでないといふ事は其の音調の上にも現はれてゐます。兎に角口から口へ傳承されたものであるといふ事は考へられる。其の間に多少變化もし、修正潤色等も加へられたことであらうが、さうかといつて全然後世の作であるとはいへないのであります。又其歌風は後世のものと違つて色々な點で現在詩歌にたゞさはる吾々に考へさせ、反省させ、暗示を與へるものが多いのであります。其の特徴と思はれる所を歌の内容の方から見ると、どうも記紀の歌には戀愛の歌、戦争の歌と自然を驚く歌が多く、時に酒盛の歌なども交つて居るのであります。戀愛の歌の多いのは昔の人としては自然のことでありまして、其當時の生活は今日の様に複雑になつては居ませんし、同種族の結合といふことは現今よりはずつと必要になつてゐました。その結合の必要も生殖とか蕃殖とかいふ關係で吾々が今日感ずる以上なものがあつて、全く本能的な自然的な傾きを持つてゐたのであります。故に其戀愛はかかる本能的必要感に出發してゐて弄ぶといふ氣持は古代人には毛頭なかつた、全人格的活動であつたのであります。現在の吾々の生活は到底單純にはいかないゆゑ戀愛に心を傾けるといふことは出来ない。若し全人格をそこへ傾注しようとしても、餘程精神化するか、理想的方面に於てならば成立つかしれぬが、頗る不自然を免れ得ないと思ひます。そこで今人の戀愛には強みなく、戀愛の歌にいいものがなくてこけおどしに終るのが多い。古人に於て其歌に力あつて自然にひびくもの多いのはつまり戀愛に於ける古人の精神的交渉が必然であり自

然であつたからであらうと思ひます。

それと同じ様な意味で戦争の歌の多いのも古代人の生活が矢張り然らしめたものでありまして、當時の社會にあつては此方が亡びるか向うを亡ぼすかしなければならなかつたのでありますから、今日戦争に對する吾々の感じとは違つて其勝敗は直接同族の生存に影響するがゆゑに自ら感奮の程度も深かつたと思ひます。つまり戦争も矢張り重要な生活の一部であつたのであります。

次に自然に對しての驚嘆も哲學的な深さはないとしても、丁度子供が物に驚くやうな無智から來る驚き、素朴な驚きがあつたのであります。酒盛の歌の多いのは古代人の生活のおほらかな安らぎの一面の發現に外ならぬことと思はれます。

第二の特徴として古代人の歌には人の心を思ひやると云ふ様なことは少いのであります。萬葉集へはひると

あごの浦に船乗りすらむ少女等が玉裳たまもの裾に潮みつらむか

といふやうなものも見當りますが、記紀時代に於ては誠に乏しいのでありまして、さういふ方面についてはまだ精神が分化して居らなかつたのであります。随つて現はれ方も粗大で甘味を付ける程には進んでは居ません。そこに又原始的な素朴なよい所もあるわけであります。丁度我儘な子供が爲たい放題に活動して、他人の爲に考へる様な餘裕も能力も無いと言つた様な感じがいたします。丁度「挿

話、ロシアの兵士の話」のやうな單純さであります。随つて趣を構へるやうな歌とか所謂思想的の歌など殆どありません。例へば天皇に對する考へとか父母への孝愛とかを直接うたつたものはない。然しさういふ心持が全然無かつたかといふと、歌にまでは表現されないにしても其萌芽は滿ち滿ちて居つたのでありまして、要するに自然を詠むにも情緒をうたふにも子供のやうな心で何等意識して歌ふことなく率直に自他の區別もなく、湧出づる原始的な生な感動そのままを歌ひあげて居たのであります。

それから又歌の形の方面に於ても吾々に考へさせるものが多い。古事記でも後の方の歌とか、萬葉集の歌になると大抵五七調の形になつて居るが、大體記紀では色々な形式を存し一定して居ません。例へば諾冊二神の「あなにやし、えをとめを」「あなにやし、えをとこを」の様に二句で成るもの、日本武尊の條の「はまつ千鳥、濱よはゆかず、磯づたふ」のやうな三句のものもあれば四句のものもある。又五句で成つてゐる。

あか玉は 緒さへ光れど 白玉の 君がよそひし たふとくありけり

のやうなものもあり、六句から成るものもあります。又其の各句が四音より成るもあり五音、六音、七音と色々ある。思ふに今の新體詩を作る人々なども、かういふ歌や萬葉集の長歌などを味ひ、其處に出發點を求めなくては日本の詩として根本的な發達は望まれないと思はれます。でないにしても斯う

いふ所から出發したのもあつてよいと考へます。記紀の歌から三十一文字の歌になつて來たことには無論自然な變遷の理由があるのですが、これを例へて下の根の方に統一されたものとすれば、詩は上の方に發展させて葉を茂らせた様なものであつて良いと思ふのであります。

それでこの四音六音などの歌を讀んで見ると和歌とは異つて何となくごちない氣持がするが、昔は調子を付けて歌つたものであるから、形は色々あつても要するにうたつて良い心持がすればよかつたのであります。却て不定形の方が自然で感情を拘束することなしに盛れたことと思ひます。そしてその中から自然に良いものが出て來たのでありませう。今の様に讀み下してすらすらと工合のよい三十一文字になつたのは後世のこと、萬葉集から古今集と次第に其濃度を増して來たのであらうと思ひます。

兎に角、記紀の歌は本當に土から掘出したばかりの様な、直接な生な感じがするけれ共、それが自然であるといふ所に得がたい面白味があります。この自然といふことが藝術の第一の要素であつて、人麿などの歌が完成されてゐると同時に一面この自然性が活々として残つて居る所があるから良いのであります。

吾々は萬葉集から影響を受けるより一層溯つてこの記紀の歌に味到して、其處から出直す必要があると思ひます。大體一般に就いては此位にしておいて歌の方へ進みませう。ここに引用した歌は有朋

堂文庫の古代歌謠集からとつてあります。

(1) やくも立つ 出雲八重墻 妻ごみに 八重墻つくる その八重墻を

これは素盞鳴尊の御歌であるが、大抵の人は後世の作であるといつてゐる。少くも素盞鳴尊の御歌ではないといふ説が多い。然し古事記には「故是を以て其素盞鳴尊、宮造るべきところを、出雲の國に求ぎたまひき、爾に須賀の地に到坐して詔りたまはく、吾此地に來まして、我が御心清々し、とりたまひて、其地になも、宮作りて坐し坐しける。(中略)其地より雲立騰ぼりき。爾御歌作したまふ。其のみ歌は」とあつてこの歌になつて居る。

「やくも」の「や」は「いや」でいよいよ、澤山の意、盛んに雲が立つといふのである。「いづも」は宣長の説によれば出で雲の約りたるもの。「八重墻」はいややへがき(彌重墻)。「つまごみに」は紀には「つまごめ」になつてゐるが、多少意味が異つて來る、つまごもる料としての意で、矢張り「ごみ」の方が良い。つまり「ごみ」はごもりが約つたのである。此場合「つま」といふは、單に妻だけではなく夫婦をこめていふので、直接自分も籠るのである。「その八重墻を」の「を」は感歎詞である。雲がいくらもいくらも出て來る、出て來る雲が幾重にも幾重にも墻を作る、吾々二人がこもるために其雲が八重墻を作るよと私は解します。宣長なども大體さういふ風に説いて居ります。この歌を讀むと高天原を追放される前の尊の荒々しい姿はなく、出雲の國つ神を平定し、新しい土地を得、美し

い櫛名田姫を得て大層おとなしく、しかも丹念に國土を經營されたさまが思ひやられる。その氣分を天然現象の崇高にしてさやさやしい所を捉へて現はして居るのであつて、尊の大きな意氣が見える心地がいたします。全體のうちの四句が皆、雲の壯大な感じを形容し賞め讃へた句になつてゐて、第三句に僅かに「妻ごみに」と自分の身にかかはる所をいつてゐる點に注意すべきであらうと思ふ。之を畫に例ふればむくむくと湧く雲を描いて、其の中に山の頭を一寸あらはして雲の深さ宇宙の大きさを思はせた様なもので、全體に希望の光と隆興のすがすがしい心持がこもつてゐて、同時に「妻ごみに」の一句によりその悦びを具體化し人の實感に訴へるものがある。しかもその雲は眼前の光景であつて、單純に直押しによんで居ながら細かに見れば皆多少の變化を有して居る所が面白いのである。例へば、第一句は「いや雲が立つよ」といふのであつて雲の立つてゐる情態に感歎してゐるのかと思ふと、第二句は或る移動状態を示し八重墻をなせりのなせりが略してあると見てよいと思ふ。然るに第四句は「八重墻作る」で、ある形態をとつてしまつた姿をいつてゐる。そして第五句には其のをさまつた八重墻を感歎してゐるのである。然もこれが意識的に成されたのでなく耐へきれない悦びの自らなる現はれなのであります。如何にも調が整然として居るので橘守部などは斯く形の整へるは古代の作ならず必ず後世修飾せるものであらうと云つて居る。兎に角この歌などから見ても古代の歌には可成り誇張法が用ひられながら自然を失はぬ所があると思ひます。

(2) 八千矛の 神の命は 八洲國 妻覓ぎかねて 遠々し 越の國に 賢し女を 在り
と聞かして くはし女を 在りときこして さ呼ばひに 在立たし 呼ばひに 在
りかよはせ 太刀が緒も 未だ解かずて 襲おぎひをも 未だ解かねば 少女の なすや
板戸を おそふらひ 我が立たせれば 引こつらひ 我が立たせれば 青山に 鶴たね
は鳴き さ野つ鳥 雉はとよむ 庭つ鳥 かけは鳴く 慨うれたくも 鳴くなる鳥か
この鳥も うちやめこせね いしたふや 天走あませづかひ 事の語りごとも こをば

これによく似た歌が紀の繼體帝の御歌「やしまぐに……あけにけり我妹」があるので、矢張り後人の作だと言はれて居る。又萬葉集卷十三にも類似のものがある。

大國主命の御歌で、命が既に須世理姫を得られてから後、「越の國の沼河姫を婚ひに幸行しし時、其沼河姫の家に到りて歌ひたまはく」としてこの歌がある。

「八千矛の神」の「八千矛」といふは多くの矛の意で大國主命の別名である。この御名は素盞鳴尊から貰つたもので、命が國土經營に苦心慘憺された偉人であつて、其の御名が國々に響いてゐたところから起つたのであらうと思ふ。命は非常な苦勞を嘗められた神でありますが、其の一面にはおほらかな性質を持つて居られたやうであります。「八洲國」といふのは國産みの縁起から出たので、「妻覓ぎかねて」は妻を求めかねてである。「越の國」といふは今の三越地方に互る國。「賢し女」は賢い